

松田秀任と加賀

——『武者物語』・『武者物語之抄』の記述をめぐって——

森 暁子

要旨 松田秀任の実像について、その武辺咄集『武者物語』・『武者物語之抄』の記述を読み解き、兵学者としての一面、逸話の情報源と成り得た人脈等を解明した。その上で武辺咄文化の盛んな加賀藩と兵学講義で繋がっていた証拠を示し、また刊行当時の加賀藩の状況が、『武者物語之抄』における本文の訂正に影響を与えた可能性について考察した。さらに秀任から兵学上の弟子の関屋政春を介して加賀に伝わったと思しき武辺咄を紹介した。

はじめに

松田一楽入道秀任は、『武者物語』（以下『武者』）（承応三年成、明暦二年刊）および増補版『武者物語之抄』（以下『抄』）（寛文七年成、同九年刊）の著者として知られる。『武者』三巻三冊は「古き侍の物語に曰」から始まる六十二の話題と、末尾の歌集「佃が軍歌」から成る。大半がいわゆる戦国時代の逸話で、各地の武将にまつわる幅広い話題を収める。『抄』七巻七冊は、基本的に「本書」と称する『武者』の本文を記載した後に、人名・地名等の注釈や、関連する逸話等を追加したもので、積極的に情報を付加する傾向にある。

この二作品は板行された武辺咄集（武士の逸話集）の嚆矢で、読み物として流布した。軍書（広く「いくさ」をめぐる書物）に属するが、文学（仮名草子）とも捉えられている。後代、その形式を模倣した武辺咄集が生み出されたのみならず、戦国の歴史叙述の典拠や、小説の材料としても使われてきた。

しかし秀任の来歴や、『武者』・『抄』成立の背景には、今までほとんど言及がない。『国書人名辞典』には「兵法家〔生没〕生没年未詳。江戸時代初期の人。

「名号」名、秀任。通称、金七郎。号、一楽・一楽斎。「経歴」大和の人。小幡景憲の門人。松田流軍法と忍術の祖。初め加賀金沢藩主前田利家に仕え、のち安芸広島藩主浅野光晟に仕えた」云々とあるが、根拠は明らかでない。

さて、加賀の前田家では「夜話」（武辺咄等、夜間に行われた武士の語り）が盛んで、初代利家の『垂相公御夜話』をはじめ藩主周辺の逸話の集成が多く伝わる^{〔1〕}。秀任が当地に所縁の者なら、その武辺咄文化の影響を受けた筈である。そこで本稿では『武者』・『抄』の記述を読み解き、秀任の来歴と情報源を整理した上で、加賀藩との関わりについて考察したい。

以下、『武者』は石川県立図書館李花亭文庫本（明暦二年刊）に、『抄』は国立公文書館内閣文庫本（寛文九年刊）により、句読点を私に付した。翻刻は菊池真一・西丸佳子氏編『武者物語・武者物語之抄・新武者物語 本文と索引』（平成6年3月・和泉書院）も参考にし、引用の際には同書の番号にならない、『武者』一話目なら「〔武者〕1」、『抄』五話目の追加分なら『抄』5のように示した。ただし「佃が軍歌」に『抄』で追加された文章部分は一括で『抄』佃」と示した。

I 松田秀任の実像(1)―兵学者

『武者』・『抄』には、秀任自身の実像を窺わせる記述が散見される。まずは秀任が武田流兵学者で、創始者・小幡景憲の直弟子だろうことを確認しておく。詳細は別稿で述べるが、『武者』・『抄』には武田流兵法の根幹テキストである『甲陽軍鑑』の利用が多く、武田信玄・徳川家康・北条氏康を良将とし、大内義隆・北条氏政を暗愚とする人物観に則っている点からも、それは明白である。特に『抄』では、景憲の名前や具体的な教授方法・兵法用語の記述が大幅に増加するが、それは寛文三年に没した師・景憲への追慕ゆえだろう。「老士」とぼかして記される人物の大半も景憲を指すと思しく、親しく師事した様子が垣間見える。

さて、武田流の兵法講義における合戦記重視については石岡久夫氏『日本兵法史』上(昭和47年7月・雄山閣)に指摘があるが、合戦記を内包した武田咄集もまた、重視されていたと考えられる。景憲の談話を集成した『景憲夜話』や、『翁物語』(直弟子・小早川能久による記録)等の武田咄集が存在する。これらを見るに、自流の兵学の実例として、また自流の崇める武將の称揚のため、武田咄集が用いられていたと思しい。信玄・家康の話題が特に多いのは、両者を讃える『甲陽軍鑑』を中心に据え、武田旧臣を多く擁した徳川幕府に接近し繁栄した、武田流の在り方を反映したものでろう(2)。

『武者』・『抄』に載る話には、この二作品と共通のものもある。『景憲夜話』は成立未詳だが、承応元年から寛文八年にかけて書かれた『翁物語』は、『武者』・『抄』と同時代の作品である。『武者』・『抄』は突如この世に出現した新しい作品ではなく、兵学講義の伝統の上に成ったものである。

ただし秀任が武田流の深奥に達していたとは思えない。例えば団扇・采配の記述に「団扇は信玄流をしらず」とある(抄10)。ここから学問の主体を武田流(信玄流)としていても、伝授を許されない知識があったと知れる。管見では武田流兵学者一覧の類に秀任の名を見出し得ないが、それは免許等を得るに

至らなかったためではないか。景憲を「老士」とぼかしてその発言を記す姿勢からも、秀任が直弟子の中で上位におらず、遠慮があったことが推測される。

なお、多少の他流派の知識も持つ気配がある。『武者』と同年刊の秀任の兵学書『三將軍解』が、武田・上杉・織田の三家の兵学を論ずる点からもそれは推測されるが、正統に学んでいないものもあることが窺える。例えば『抄』で説明なく消えた「武者の六具」(武羅・箆・兵拾・小旗・扇・鞭)の話題(武者51)は、小笠原流弓術の秘伝「六具番大事」と酷似する(3)。さほど重要と知らず載せたところ、抗議を受け削除した可能性が考えられる。

II 松田秀任の実像(2)―一族と情報源

次に秀任の武田咄の情報源を、兵学以外の人的要因から探る。まずは秀任自身の一族にまつわる話題に注目したい。『武者』・『抄』45は、先祖と周辺的人物を取り上げたものである。以下に『抄』の文章を抄出する。

一 古き侍の物語に曰、下野国佐野天徳寺宗綱入道の内、松田金七郎秀宣といふ侍あり。生国和州侍なるが、弓矢に功の者と聞えよび給ひて、天徳寺上洛の時分、かゝへ給ひて下らる。 (中略、秀宣の大力のこと) 天徳寺逝去の後、蒲生氏郷へかゝへらる。氏郷逝去の後、濃州関ヶ原合戦の刻、長束大蔵太輔手に属し(熊手で奮戦の末、討死したこと)

(以上『武者』該当分)

伝へて書。松田金七郎事、和州添下郡栗殿より出たる侍なり。父は松田新入斎と云。右の金七郎は、和州高取の城主・松倉右近太夫重信甥なり。しかるゆへ、肥前国嶋原の城主成し松倉豊後守重政と、松田金七郎はいとこなり。新入斎事は、元来松田・杉田とて、和州戒重の城主・戒重甲斐守殿の両臣なり。杉田は越前宰相忠昌卿の家臣、杉田壱岐守のためには祖父なり。松田は、今の金七郎が曾祖父なり。毛利大膳大夫綱広卿の内、松田権左衛門龍宣ためにも曾祖父なり。(中略、秀宣死の別伝) 金七郎噂の事は、

佐野天徳寺児小姓だちの侍、高坂富右衛門と申仁、後は稲垣摂津守殿に居られたるが、様子くはしくぞんぜられ、度々におあて物語いたされたるをうけ給る。又は、浅野因幡守殿内松田半太夫、右の金七郎といとこなるゆへ、よくしつてかたられけるをうけ給りて、かくのごとし。

(『抄』追加分)

当時有名だったとも見えない秀宣の話題が『武者』に載った理由が、おそらく先祖顕彰のためだったことが『抄』に至り判明する(『今の金七郎』が秀任なことはIV参照)。他に『抄』佃の松田金七郎の歌の解説にも、宗綱が旧主で、氏郷配下では八人の足軽大將中、最大の身分だったことが記される。右の45から秀宣を中心に関係者を抜き出すと、次のようになる。

【A】戒重甲斐守(大和国戒重城主)の家臣

・父の同輩 杉田——○——杉田老岐守(三代福井藩主・松平忠昌の家臣)

【B】親類

・父 松田新入斎(戒重甲斐守家臣)

——松田金七郎秀宣

(大和国添下郡栗殿出身、佐野天徳寺宗綱入道↓蒲生氏郷↓長束正家と仕える)

——○——曾孫「今の金七郎」松田秀任

——曾孫 松田権左衛門龍宣(二代長州藩主・毛利綱広の家臣)

・おじ 松倉右近太夫重信(大和国高取城主)

——いとこ 松倉豊後守重政(肥前国島原城主)

・○——いとこ 松田半太夫(初代三次藩主・浅野長治の家臣)

【C】佐野天徳寺宗綱の家臣

・高坂富右衛門(佐野宗綱の児小姓出身↓稲垣摂津守重綱の家臣)

波線を付けた松田半太夫と高坂富右衛門は秀宣をよく知ると記され、この45の情報源と知れる。さらに右には、他の話題との関連が窺える人名も見える。

【A】では、杉田老岐守は松平忠昌の家臣だが、忠昌の正室は浅野幸長女、

娘の一人は毛利綱広正室で、秀任の親類の二つの主家とも関わりが深い。忠昌同母兄の二代福井藩主忠直に關して、大坂夏の陣でその家臣が真田左衛門佐らを討ったこと(14)、真田家の系図中の忠直に仕えた人の情報(抄15)、真田の首を取った忠直家臣・西尾仁左衛門(抄56)と話題があるが、老岐守がこれらの出処の可能性がある。

【B】では、まず秀宣の主君の内、佐野天徳寺宗綱に關して、宗綱の軍扇の図が載り(抄10)、今川義元旧臣・新井加賀守を宗綱が庇護し、昔馴染みの家康に引き合わせた話(抄佃)もある。

蒲生氏郷に關しては、氏郷の発言の誤りを家臣の佃又右衛門が否定しなかった話(17)、忠郷(氏郷孫)死後に会津藩主となった加藤嘉明が抱えなかった牢人(37)、奥州九戸一揆の年次情報(40)、秀吉の命令で氏郷が出陣したことは『抄』、氏郷と木造左衛門の戦った勢州曾原合戦(抄38)がある。嘉明がその牢人を次男に抱えさせた話の追加や(抄37)、その他にも少々嘉明の名がある点から見て、蒲生氏に従い会津藩に行き、そのまま当地へ残った一族が情報源にいたのかもしれない。

また『武者』に収録される「佃が軍歌」は、氏郷旧臣の佃又右衛門が名将名士の直接・間接の物語を歌に仕立てたものといひ(抄佃)、武士・合戦の心得を示すものだが、ここには氏郷と親類・家臣計七名の名を冠した歌が含まれ、『抄』ではさらに個々の人物の説明や逸話が追加される。先祖の旧主の内、秀任が最も興味を抱いていたのはこの氏郷と思ひ。先祖と關わる「佃が軍歌」を自分の兵学に取り込み、独自性を打ち出そうとしていたかと推測される。

なお長束正家については目立った話題はなく、丹羽長重が秀吉に逆心の時に従わなかったと、僅かに記されるのみである(抄30)。

また親類の内、松田権左衛門龍宣が毛利綱広家臣であることが注目される。『武者』・『抄』には毛利家所縁の話題が多い。小早川隆景(元就三男)家臣の大力の侍(4)・秀吉筑紫陣の際の隆景の作事と元就子息および小田原陣での隆景の動向(抄4)、元就の和歌(21)・元就経歴と家系図(抄21)、尼子家臣・

山中鹿之助と毛利家臣・岡筑前(41)・毛利・尼子氏合戦の経緯と鹿之助・筑前の軍功(抄41)、毛利家臣・品川狼之助の首を鹿之助が取ったこと(56)、少年時代の元就の厳島詣で(抄5)、吉川広家(元就孫、周防国岩国藩初代藩主)家臣・井筒女之介(抄16)、関ヶ原合戦後に秀元(元就孫・輝元の、従弟で養子)が安国寺を逃がしたこと(抄20)、元就と河野が戦った古い予州金子陣(抄40)、女之介の女装の理由と来歴、父と子孫のこと(抄佃)がある。

周辺の諸家についても、尼子家に関する話題で他に、家臣・田子時隆の心掛けと没落前の怪異・和歌(28)がある。また大内家に関する話題に、義隆幼少時に守役が銭を不浄と教えたこと(12)・先祖と義隆領国、陶の反逆(抄12)、義隆が家老・陶晴賢に滅ぼされ陶も元就に殺されたこと(27)・陶の逆心と合戦の経緯(抄27)、義隆の浮気を知った妻が夫と相手に贈った和歌(49)・義隆が好色で盲将なこと(抄49)がある。

『甲陽軍鑑』品第六に拠る少年時代の元就の逸話や、大内義隆に対する見解から見て、右の話題は、武田流兵学者としての興味から収録されたとも解釈できる。ただしこの中には、龍宣が毛利家に身を置いていたからこそ得られた情報もあると推測される。

親類では、秀任の情報源の一人と明記される松田半太夫も注目される。半太夫が仕える長治の三次藩は広島支藩だが(4)、浅野家の話題も『武者』・『抄』に多い。塙団右衛門の首を幸長家臣の八木新左衛門が取ったこと(61)、近年の長治による孝子表彰(抄6)、織田七兵衛の首を取った上田主水助と、塙団衛門の首を取った八木新左衛門(共に初代広島藩主・長晟家臣)のこと(抄56)、幸長の忍城攻め(抄佃)がある。『抄』56八木の話題には、長晟が大野修理らと戦った泉州榎井合戦の物語も長々と記される。以上には、半太夫経由で得た話題が含まれると推測される。

【B】においては、松倉氏に関わる話題もある。松倉右近太夫重信が語ったという臆病者の武士の逸話(13)は、出処が明記される数少ない話題の一つだが、これは明らかに松倉氏から得た情報である。

【C】では、高坂富右衛門の、佐野宗綱の兄小姓出身で、その後稲垣重綱に仕えた経歴が注目される。大坂夏の陣で重綱が母衣武者を仕留め、家臣の新井勘右衛門に首を取らせて家康に見せ、その日の一番となったことと、勘右衛門父・加賀守を宗綱が遊客としたこと、牢人だった勘右衛門を重綱が抱えた次第が並べて記される話(抄佃)は、彼の語りによると思われる。

以上のように、『武者』・『抄』には秀任の親類・知己から得たと見られる話題が多く含まれる。さらに広島に関わる蟹(可児)才藏(55、抄佃)、井筒女之介(16、抄佃)の話題は、当地が毛利家旧領かつ浅野家が藩を構えていた地であることから、複数の人物を介して秀任の耳に入り得たものである。またここに挙げた他にも、地理的に右の人々に近い話題が散見される。彼らが直接の情報源でない場合でも、その繋がりがあつたからこそ、興味を持って記された話題もあつたと考えられる。

その他、情報源については『抄』に散見される「今の○○」なる人々が注目される。例えば先述の泉州榎井合戦(抄56)には、「(物見に出た)高野道斎は、今の高野小兵衛が伯父なり」などとある。このような調子で、身分がそう高くもなさそうで、有名とも考えられない人名も多く記される。これらは『武者』・『抄』の話題の提供者で、秀任と直接・間接の繋がりがあつた人物と見てよいだろう。この「今の○○」が数多く記されたのは、情報源を明確にする秀任の意図と共に、登場人物との関わりの明記を望む「今の○○」側の意図も強く作用したためと推測される。秀任も曾祖父・秀宣の顕彰が『武者』執筆動機の一つと思いが、武士にとって先祖の名誉は、主家に厚遇されたり、仕官にありついたりするのにも、非常に力を発揮したからである。

一見あらゆる武士の話題を収めんとしたような『武者』・『抄』だが、取り上げる地域・氏族に実は偏りがあると分かった。以上を踏まえ、例えば関ヶ原合戦の話題を見渡すと、徳川方の逸話があるのは、家康を評価する武田流兵学者としての姿勢から、石田・安国寺・小西の死に際の立派な態度(抄20)をはじめ西軍方の逸話があるのは、曾祖父・秀宣が豊臣配下の家臣だった親しみから

で、結果的に東西軍両方にまつわる話題が公平に記されるに至ったと見える。またキリシタン佃又右衛門が棄教しなかったことを、武田家臣で日蓮宗の原美濃守が念仏を拒んだ先例を引き評価しているが(抄17)、これは作中で明記していないが、秀宣旧主・氏郷もまたキリシタンだったためだろう。高山南之坊(右近)の知見や(抄30)、明智光秀息女(ガラシヤ)の見事な自害(抄36)が収載された理由の一つにも、そのことがあると見える。

『武者』・『抄』は、兵学講義で扱われていた武将、親類・知己との繋がり、先祖顕彰の意図といった、実は秀任の個人的な人的要因が色濃く反映されて成立したものだたと考えられる。

Ⅲ 松田秀任の実像(3) — 年齢・身内・刊行

その他に読み取れる細かい情報も整理しておく。年齢は、奥書の記述が示唆している。『武者』の承応三年奥書には、「一楽」の名乗りの意図を示す「楽ならば楽をもしらずすぎなまし苦のあればこそ一楽もあれ」という自作和歌がある。これについて『抄』の寛文七年奥書では、「右の口ずさみは、某三十歳余の気さかなる時分の謔言なり。いままた五十歳を過ぬれば、気おとろへ、いにしへを悔る事のみなり」と語っている。一楽を初めて名乗ったのが承応三年だとすると、その年に数え年で「三十歳余」、寛文七年に「五十歳を過」ぎた年齢となる。すると、考えられる秀任の生年は、元和二年生まれ(承応三年に三十九、寛文七年に五十二歳)、元和三年生まれ(承応三年に三十八、寛文七年に五十一歳)、元和四年生まれ(承応三年に三十七、寛文七年に五十歳)のいずれかとなる。また『抄』18には妹の一周忌に詠んだ歌が記されているので、寛文七年までに妹を亡くしたことも知れる。

なお『武者』板行の経緯について、『抄』46に「(鈴木田隼人佐の失態の逸話は)本書へかきのせべき儀にあらね共、以前聞書の内に書とめて置たるを、所望の仁書写有て、今天下に流布する所なり」と弁解めいたくだりがある。『抄』

では板元が変わるので、一見『武者』刊行に秀任の関与が薄かったとも解釈できるが、そうではなく、板元・荒木利兵衛(寺町通)とも交流があったらしい。『武者』刊行の一ヶ月前、明暦二年二月に、秀任著の兵学書『三將軍解』が同じ荒木から出ている。その上、武士の子を町人百姓の間で育てると言葉が乱れるという話題(19)は慶安三年刊『かたこと』の利用と面白いが(5)、その板元もまた荒木である。また平等院無量寿院の扉の名筆の上の落書きのこと(抄2)、慣用語だが、清涼寺の脇侍を実際に知る風情の「北野の笑仏のゆびをさすごとく」の表現(抄奥書)など、自身の見聞の反映と思われる記述もある。『武者』・『抄』刊行の頃は、秀任は京にいたようである(6)。

Ⅳ 加賀と松田秀任(1) — 兵学者としての活動

『武者』・『抄』から読み取れる秀任の情報を整理した上で、加賀藩との接点を探る。まず、初代三次藩主・浅野長治(二代広島藩主・浅野光晟の庶兄)に仕えていた松田半太夫を通じて、加賀藩絡みの話題を得ていたことはあり得る(7)。浅野家と加賀藩主の前田家は秀吉配下時代からの親しい間柄で、前田家から浅野家への興入れが度々行われ、その際藩士も移動するなど、近世にも交流が頻繁だった。

さて、加賀藩の史料に、秀任の名は見当たらない。もし元藩士なら史料が残らないのも当然だが、後述のように『武者』では前田家の歴史で重要な浅井暁合戦の大將を利家と誤っているし、利家の賤ヶ岳での裏切りという印象の悪い話も載る(抄佃)。主従関係を仄めかす表現も見当たらず、秀任が利家に仕えた説は疑わしい。奥書から推測される秀任の年齢からもあり得ない。

しかし加賀藩士・関屋新兵衛政春(元和元々貞享二)の著作に、秀任と加賀藩の別の繋がりが見出せた。政春は当藩における武田流隆盛の基礎を築いた兵学者で、武田流を藩の主流に押し上げた有沢永貞の師・叔父である。その政春の、武辺咄中心の雑文集『政春古兵談』(以下『兵談』)(8)に収められた、若

い頃の武術・兵学修行の回想に、秀任が登場する。

政春若キ時分、(中略、武術修行のこと) 軍法ハ、江戸ニテ松田金七ト云浪人、『三將軍解』并『武者物語』ナドニ作りテ板行シタル者也、此者弟子ニ成テ、赤坂小六ノ宮ノ後口、弾正様ノ下ニ宿在テ、本郷ヨリ此所エ通ヒ、『甲陽軍鑑末書』ヲ聞。其後、金七中国ノ者ニテ本国エ行、不通也。

又、越前浪人ニ、堀尾作左衛門ト云者、片山了庵弟子ニテ、『師鑑抄』ヲ相伝ス。此作左衛門ニ弟子ニ成、許ヲ取。是ハ御国ニテノ事也。又、江戸ニテ、小笠原老岐守殿家老・大久保庄右衛門弟子ニ成テ、是モ許ヲ取。又、川島七郎右衛門ト云浪人ノ弟子ニ成、『末書(甲陽軍鑑末書)』、『結要本(甲陽軍鑑末書結要本)』、『三品(豹業品・虎略品・竜韜品)』ノ許ヲ取。明暦ノ比ヨリ山鹿甚五左衛門弟子ニ成、『雄鑑抄(兵法雄鑑)』、『士鑑用法』、『武教全書』等ヲ聞伝(後略)

(陽の巻・二十五条目)

右から、秀任が江戸で武田流の兵学講義により世渡りをしていた浪人だったと知れる。また、末尾に「松田氏某」とのみ記される『三將軍解』も、確かに秀任著であると記されている。

赤坂小六の宮というのは現赤坂四丁目・青山通り沿いにあった氷川明神社を指す。すると「弾正様」とは、現赤坂五丁目に中屋敷を有していた三代広島藩主・浅野綱辰(母は三代加賀藩主・前田利常女)と思しい。綱辰は承応二年に弾正少弼に叙任、寛文八年に弾正大弼に改め、同十二年から延宝元年一月二日の死去まで藩主だった。陽の巻の奥書は延宝元年極月廿六日で、『兵談』は政春が子息に宛て著した書物なので、「弾正様」は政春若年当時ではなく、子息が聞いてそうと分かる、執筆時期の人物を指すと理解してよい。

秀任が浅野家中屋敷付近にいたことを示すこの記述から、親類を介し広島藩と関わっていたことが推測される。広島藩は武田流・北条流の兵学を採用していたので、当時の秀任の兵学講義には、広島藩士が多く出席していた筈である。その縁で秀任の兵学講義に、広島藩と交流の頻繁な加賀藩士も出ていたと思し

い。前田家上屋敷のある本郷から赤坂までわざわざ政春が通っていたのは、そのためだろう。兵学講義の場で直接広島・加賀藩士から話題を得、それが秀任の著作に表れた可能性も十分あることが、ここから判明する。悪役にされがちな後北条氏旧臣(家老)・松田尾張守一族に関わる話題が見えるのも、同姓のよしみだけでなく、その子孫が有力な加賀藩士だったからではないか。尾張守従兄弟(の一族は幕臣)の語った話が出処を明記して載せられている上(25)、通常「憲秀」とされる尾張守の名が「政賢」と記されるのも(抄25)、加賀藩の『諸士系譜』(1631—49、天保三成)が「政質」と伝えるのと類似性がある。

なお先述のように秀任の生年を元和二・四年と推定すると、同元年生まれの政春より若い師匠となるが、政春の師として有名で右の回想にも名前の挙がる佐々木四郎兵衛秀乗(川島七郎右衛門)は元和七年生まれ、山鹿素行(甚五左衛門)は元和八年生まれでいずれも政春より年若である。学問上の先達であれば、自分より若くても師事するのに違和感はない。

また秀乗も素行も小幡景憲の直弟子だが、秀任も先述の通り景憲直弟子と考えられる。景憲直弟子の浪人兵学者たちが講義を行っていた時代で、政春は江戸で秀任を皮切りに、その面々を渡り歩き修行していたらしい(9)。そして武田・北条両流派を政春と一緒に学んでいたことにも注意しておきたい。回想中には『師鑑抄』、『雄鑑抄』、『士鑑用法』といった、北条流兵法創始者・北条氏長の著作が見える。加賀藩では永貞が武田流に北条流・山鹿流等の学説を融合して内容を豊富にしたというのが一般的な見解だが、政春若年当時すでに、江戸・加賀(御国)で武田流と北条流を並行して学ぶ環境があったと知れる。秀任からは『甲陽軍鑑末書』を学んだことしか記されていないが、『抄』40の国府台合戦の話題に氏長著の兵学書『古戦問答(兵法問答)』が引用されることから、秀任が北条流の知識にも目配りしていたのは明らかである。加賀藩での武田流発展の基礎に、政春の武田流・北条流修行があったこと、その最初に師事したのが秀任だったことは特筆すべきだろう。

政春が秀任のもとへ通ったのは、政春が加賀藩に出仕した寛永十年以降とな

るが、あまり長期間師事した様子はない。おそらくは寛永後期頃に、秀任は中国（本国というのは文字通り出身地か、そちらにいる親類を頼ったということだろう）へ移動したかと考えられる。Ⅱに挙げた中国方面の話題には、移動後に当地で秀任が採集したものもある筈である。なおそこで仕官した可能性もあるが、現時点でそういった記録は管見に入らない。『武者』・『抄』には、一つの家中に留まらない江口三郎右衛門（8）、井筒女之介（16）などの優れた渡り奉公人や、曾祖父・秀宣をはじめ、何度か主君を変える武士が登場する。望んでそうしていたかは不明だが、秀任も浪人兵学者として、身軽に動き回り見聞を広げて過ごしていたとも考えられる。

V 加賀と松田秀任（2）—浅井畷合戦記事と加賀藩士

さて、『武者』・『抄』には加賀藩前田家に関する話題に、小松城主・丹羽長重と戦った浅井畷合戦（30）、柴田勝家旧臣・種村肖推寺（後に浅野家臣）に仕官を断られた利家の贈り物（抄56）、賤ヶ岳合戦（抄佃）がある。また浅井畷合戦で敵対した丹羽氏についても、長重家臣の小笠原大頭と江口三郎右衛門（武者8）・長秀来歴と大頭のこと（抄8）、光重（長重子息）の抱えた浪人（抄53）の話題がある。

浅井畷合戦の話題（30）は利家と誤っていた大将の名をはじめ、『抄』で全体にわたり訂正され、追加分も丹羽長重の秀吉への逆心、佐々成政のこと、高山南之坊（右近）による小松城の堅固さの指摘、長重の同城整備と、長い点が特異である。

「本書」と称する『武者』の文章は『抄』に基本的にそのまま載るが、重要な固有名詞が変更されたものが三つある。一つは尼子勝久滅亡時の毛利家大将が元就から輝元になった41で、これは毛利関係者から指摘を受けた可能性がある。もう一つが、堀尾帯刀らが石田三成方に襲われる50で、城番を仰せつかったのが、前田利家が落とした大正寺（大聖寺）という冒頭が、単に府中の城番

と訂正され、その他少々人名が訂正され、また詳細になっている。そしてもう一つがこの30である。重要な訂正のある話三つの内、実に二つが前田家絡みで、しかもこの二つには「右の物語、本書にすこしあやまりこれ有ゆへ、此書にくはしくするす物なり」（30）、「此物語、本書とすこし相違の所これあり。此本に書ところよし」（50）と異例の断り書きまである。ここから、確証は無いものの、『武者』の誤りを指摘した加賀藩士の存在が推定される。

浅井畷合戦とは、関ヶ原合戦の直前、前田利長（利勝）が大聖寺城を落とした後（大聖寺合戦）に、小松城付近の浅井畷で丹羽長重方に急襲され起きた合戦である。加賀国内で起きた合戦のため、丹羽旧臣を含む加賀藩士にとって、特に身近で重要だった⁽¹⁰⁾。当事者や当地の兵学者等によりその合戦記が数多く作られ、またその際の先祖の功績は、幕末・明治に至るまで当地の系図や家譜、藩に提出した先祖由緒帳の類に誇らしく記載されている。この一件を取り上げた30が改変された可能性として、加賀藩士の関与を考えてみたい。以下『抄』に沿い、登場する人名を全て拾い、「本書」部分該当の内容を示す。

石田三成方の小松城主・丹羽五郎左衛門尉長重と、大聖寺城主・山口玄蕃頭に、徳川家康方の金沢城主・前田肥前守利勝（利長）が敵対する。利勝は岡嶋備中守に小松の通路を押さえさせ、大聖寺へ向かう。途中で孫四郎利長（利政の誤り）が丹羽方の船から鉄砲を撃ちかけられた。大聖寺城では前田方の富田蔵人が落命するが、孫四郎の命令で本丸に攻め込み、城主の玄蕃頭・右京亮父子を自害に追い込む。そのまま前田兄弟は上方を目指すが、三成方の大谷刑部少輔吉隆に中川宗伴入道が書かされた「上方の兵船が加賀に向かう企てがある」との偽の手紙で金沢に戻ろうとする。前田方の山崎長門守・高山南之坊・太田但馬守・長九郎左衛門尉の面々が浅井縄手を通る相談をしていると、若侍の松平久兵衛が浅井縄手の足場の悪さを指摘し反対するが、容れられない。案の定浅井縄手で丹羽軍の伏兵が現れ、殿（しんがり）の長九郎左衛門尉の一団が襲われる。丹羽方の松村孫三郎が一番に乗り込み、首を二十四も取る活躍をした。一番鎧を予告してい

た久兵衛は、小橋を隔てて踏み止まり鎧を合わせた。続いて水越縫殿助が踏み止まり、太田但馬守家臣の岩田伝左衛門・大野甚之丞・井上勘左衛門等も駆けつけ、上坂主馬も続いた。丹羽方の先頭にいた^{〔11〕}拝衛次太夫・不破木工兵衛は討死した。また丹羽方の我孫子作太夫・富田小兵衛・成田助九郎も橋の上で奮戦したが敗色になり、丹羽方の桜木源太が母衣をさし馬を返すのを見て、両軍引き取った。江口三郎右衛門は前田方の後をつけ、引き取ったのを確認してから戻った。小松表浅井縄手合戦とはこの軍で、その後和議となった。利勝は軍物語の度に、浅井縄手の事を思い出すと汗が出ると言ったという。この合戦で活躍した者には感状が出され、特に久兵衛は褒められ、その後松平伯耆守とされた。前田方の褒美を聞いた丹羽方の家臣の要請で、長重も自軍に感状を出した。その際、合戦が終わった時の位置は浅井縄手の橋より二三間こちら側だったと聞き、自軍が負け気味だったかと言った。

『抄』で改変後の本文部分

右では地理・人数・日付の情報が訂正・増補され、大聖寺攻めや偽手紙の描写が詳細になった他、殿の長の一団が襲われた、松村孫三郎が活躍した、橋（山代橋）で前田・丹羽方が五対五で戦った（前田方は松平久兵衛・水越縫殿助・太田但馬守家臣の岩田伝左衛門・大野甚之丞・井上勘左衛門、丹羽方は拝郷次太夫・不破木工兵衛・成田助九郎・安彦左馬助・宮田小兵衛で、拝郷・不破が討死というのが大方）、江口三郎右衛門が前田方の後をつけた等の逸話に加えられており、当地に伝存する多くの合戦記に大分近い内容となっている^{〔11〕}。

『抄』で消えた名前について、物見に出たが丹羽方に阻止された前田方の足軽大将、上坂又兵衛は、浅井畷合戦記の数々に、鉄砲で活躍した、老人で巧者などと記されている。食い止められた不名誉は『武者』独自のもので、抗議により削除した可能性がある^{〔12〕}。また丹羽方で感状を与えられた改田・団の名も消えている。加賀藩には明治まで改田氏があり、子孫の記録によれば関ヶ原の際に先祖が利長に召された由緒を持つが、丹羽家との繋がりを示す記載はな

い。丹羽方の改田氏と無関係で迷惑したか、関係を伏せたかったかで削除を望んだかもしれない。団氏も明治まで加賀藩にいたが、こちらは丹羽長重に仕えていた先祖・七兵衛が慶長八年に利長に召され、浅井畷の活躍の際に名乗っていた「団」を名乗り続けるよう命じられたという。また団七兵衛のこの時の武勇は諸書に見える。こちらは名譽の記憶だが、団が討ったのが重臣・長氏の配下で、また元来前田方で出戻った経緯もあり、肩身の狭さからこちらでも削除を望んだ可能性がある。団には『抄』で出現した松村孫三郎と、取った首をめぐる争いがあったため、松村方の物言いでは団の名が削除されたとも考えられる^{〔13〕}。なお松村が首を二十四取ったことや、桜木源太が母衣をさして馬を返したことなど、丹羽旧臣の記事に独自のものがある。秀任の情報源と関わるかもしれない^{〔14〕}。

傍線を付けた十六名は、『抄』で新たに出現した名前である。表記や粗筋に多少の違いはあるがどれも諸書に見える名で、一々関係者からの要請によらずとも、当地で正史とされる物語に合わせようとすれば自然と加わった情報とも見える。ただ、名を間違っているのが利政の話題が付加されたのは、その室が秀任先祖の旧主・蒲生氏郷女だったためか見える。また、諸書で丹羽の家老とされる江口三郎右衛門を『抄』ではそう記さず、『武者』⁸では長重に高知で召された上方浪人の渡り奉公人としているが、これは、諸国を巡る浪人の先祖が長重に取り立てられたとする江口氏子孫の記録と共通する^{〔15〕}。秀任が江口氏周辺の人物を情報源としていた可能性を示す。

特に注目されるのが当時の前田家の重臣、山崎・長・太田・高山である。以上も諸書に載る名だが、関係者は『武者』刊行当時に特殊な状況下にあった。

山崎長門守は大聖寺攻めで先手を務め、子息は金丸の大將の首を取った。さらに城主父子の首を取るなど、多くの家臣もまた戦功を立てている。家来の侍帳には「大正持」・「浅井口」での活躍の記録が目立つ。しかし三代長門（孫）が寛文二年に逼塞（五年に病死）、その子息が四年に石高を減らされやと十五歳で召し出されたところだった^{〔16〕}。長九郎左衛門尉は殿で丹羽方に襲われた

際に主従で奮戦し、多くの家臣が討死を遂げ、その墓が合戦場に残っていた。しかし特例で有していた広大な領地の問題も含め、寛文五年頃から内紛が起き、七年には当主の子息が剃髪・蟄居、また多くの家臣が処刑・追放等の裁きを受ける事態が生じている⁽¹⁷⁾。太田但馬守は芳春院（初代藩主・利家正室）の甥という毛並みの良さを誇り、山代橋では家臣数名が感状を与えられる名譽の活躍をした。しかし慶長七年に、利長の命により金沢城中で成敗されている⁽¹⁸⁾。南之坊こと高山右近は、戦場の地形を見抜いたとか、僅かな手勢のみ率いて太田但馬守の救援に向かう姿に、長重達が兵を引いたとか伝わる。しかし幕府の禁教令により、慶長十九年に国外退去となっている⁽¹⁹⁾。

つまり『武者』・『抄』刊行の頃、浅井畷で活躍した重臣の家は、揃って没落・消滅の状況にあった。この四氏につき従い軍功を立ててきた家々は、主家の憂き目に伴い、加賀藩内での自家の処遇も悪化する危険に直面していた。そのような危機的状況の中出回っていた『武者』浅井畷合戦の次第に、活躍した主家・旧主の名が載っていない事態は、自家の名譽まで共に忘却されることを意味していた。藩主たる前田家に回顧してもらうためにも、『武者』に物言いを付ける必要が十分あったことが考えられる。

さらに『武者』の刊行後、『抄』の刊行前の寛文元年に、浅井畷合戦の価値がさらに高まる大きな出来事が、加賀藩に起きた。江戸育ちの十九歳の五代藩主・綱紀の入部（初の領国入り）に伴う、浅井畷古戦場の視察である。この合戦が脚光を浴びる事態が生じたことで、この頃加賀藩士の間には、その際の先祖の勲功を強調せんとする動きが起ったことは、容易に想像がつく。『武者』では明確な久兵衛の一番鎧が『抄』では曖昧な表現になったのも、一番鎧をめぐる当地の争いの再燃によるかもしれない。

加賀藩では寛永十四年に、刊行された『太閤記』における、利家時代の能登・国石動山合戦の記事の誤りや、自身・朋輩等の活躍が洩れていることを不満とした藩士が、家老宛てに書状を出した先例がある⁽²⁰⁾。そこには、自分が折々利家のために役立ったことを現藩主・利常に知ってほしい、この訴えは子供の

ためでもある、との思いも率直に記されている。著者の小瀬甫庵はこの訴えの当時加賀藩にいたが、その後『太閤記』が書き換えられることはなかった。しかし、同じく前田家と由縁のあった秀任の場合は、加賀藩内の状況により高まった同様の抗議を受け入れ、『抄』で書き直すに至ったのではないか。

『武者』に抗議した文書は管見に入らないが、当地に伝わる、加賀藩士の手によると思しき合戦記『浅井畷聞書』は、近頃世間に出た『武者物語』の誤りと不審の数々を、大将の名前の間違いをはじめあげつらい、「然ト様子ヲ不知仁書タリト見ヘタリ」、「能聞届記スベキ事ナリ。分ヲモ不聞届、彼書シト見ヘタリ」、「鎧ノ合タル人々ヲモ別人ヲ書記ス、金沢勢散々ノ様ニカ、レタリ」と批判している⁽²¹⁾。政春は秀任が江戸を去って後、生涯会わなかった様子だが、兵学講義や浅野家との由縁から、このような声を秀任に伝えられた人物は藩内にいた筈である。前掲『兵談』の書きぶりから見ても、『武者』は藩内で知られた存在だったと思しい。『抄』最後の目立つ位置に、大方『太閤記』の抜書で珍しくもないが、と断りつつ所々に独自の記事を含む賤ヶ岳合戦の話題が付いたのも、何か加賀藩士への配慮や、当地と秀任の繋がりを窺わせる。その際の先祖の軍功を誇る藩士もいたのである。

VI 加賀と松田秀任（3）— 武辺咄の交流

政春の著作から、加賀と秀任の武辺咄の交流にも触れておく。

『兵談』には、前田利家が普段の夜話の十中九は「武者御物語り」をした（陽の巻・百七十条目）、徳川家光が大久保彦左衛門に「武者物語」を命じた（仁の巻・七十三条目）という用例がある。ここではおそらく「武辺咄」と同様の意味で、「武者物語」が使われている。この語は辞書類に見当たらず、近世に一般的だったとは見えない。詳細は不明だが、加賀における用語だったか、『武者』の影響で政春がここでこのように表記したかだろう。

武辺咄そのものについても、同様に前後関係は不明なものの、影響が窺える。

『武者』30は「掃除坊主相手に情けない喧嘩をした木村長門が冬の陣で強敵を討ち、しかもその後もしおらしかった。夏の陣で活躍の末討死し、その首を家康が実検したところ、伽羅が焚き染められていた」という話だが、これは加賀藩士や兵学者等の語った武辺咄を多く含む政春の雑文集『乙夜之書物(以下『乙夜』)』(22)中巻三十四条目に、金森掃部なる人の語りとして類話が載る。

また『抄』22は「上杉謙信のもとに、殺した家臣の幽霊が来るようになったが、気にしなかった。しかしその後すぐ他界したので取り殺されたと噂された(以上『武者』、この家臣は優秀だったので、謙信に残念がる心があり、そのため姿が見えたのだろう『抄』追加分)」という構成の話で、最後に「昨夜踏翻茄子 無数蝦蟆来其乞命」の著語と「夏の夜に蛙を踏み殺した僧の枕元に蛙が来て命乞いをしたが、未明に見に行くと、踏んだのは小さい茄子と判明した。蛙と思った心が自分のところに来たのだ」との説明があるが、『乙夜』下巻五条目にある人の語りとして載る、御館の乱(謙信の後継者争い)の際に妻子を手に掛けてしまった武士が幽霊に責められる話の構成はこれと同様で、武士を救う和尚の語りの中に、僧の踏んだ茄子と蛙の逸話も出てくる。このような逸話の類似からも、加賀と秀任の武辺咄の交流の気配が感じられる。

最後に、政春が秀任から直接得た可能性の高い武辺咄を挙げる。

毛利家ノ小玉三郎左衛門ト云者、関ヶ原ノ砌、毛利人数四国エ渡海、伊予国御津ノ浦ト云所ニテ、加藤左馬助当守居ノ者ト、迫合アリ。此時ニ、藪内匠ト云者、鎧ヲ合テ能働キ、名高キ也。土井大炊殿御老中ノ時、「藪内匠物語ハ度々聞タレドモ、小玉三郎左衛門物語ヲ終ニ不聞。哀レ小玉来レカシ、物語ヲ聞度」トテ、毛利長門守殿エ常々、「小玉江戸エ参候ハバ、御知セ被成ヨ」ト約束也。

或時ニ、小玉来ルニ付、長門守殿ヨリ案内有之。大炊殿御隙モナキ人ナレドモ、「右ノ物語聞度」トテ、小玉ヲ御振舞、其上ニテ、「其方、伊予陣ノトキ、藪内匠ト鎧ノ事、聞及タレドモ、終ニ御自分直ノ物語、不聞。今日語リテ聞セラレヨ」ト被仰。三郎左衛門畏リ、「謹而忝奉存候。早久敷義

ニテ、失念仕、何トモ可申上様モ無御座」ト云ケレバ、大炊殿「是非被覺タル分斗リ、被語ヨ。聞度」ト被仰候ヘドモ、「失念仕候」トテ、終ニ不語。同道ノ衆ナドハ汗ヲ握リ、「是非語り候ヘ。是ハ冥加ノ至也」ト被申候ヘドモ、終ニ不語。其ニテ大炊殿、「尤」ト被仰。

帰宅シテ各「何トテ今日ハ不語ゾ」ト被申ケレバ、小玉申ケルハ、「失念仕ル事ハ無之候ヘドモ、藪内匠ト云者ハ、度々江戸エ来リ、方々ニテ右ノ首尾可語。大炊殿モ是ヲ聞召タルラン。何様ニ語タルモ不知。我等ノ物語ト、内匠口ト若相違アレバ、内匠タメ、イカゞ也。我等ハ能テモ悪クテモ、毛利ノ家ヲ離レヌ者ナレバ、名聞ハ不入候。其上、我等ハ此事斗リニ限ラネバ、左ノミ是ヲイジトモ覚不申候。惣テ、武儀少モ相違ノ事アレバ、互ノタメ如何」ト云ケレバ、各「尤」ト云。大炊殿ハ、トクニ合点マシクシト也。

松田氏語ル。

『兵談』仁の巻・百二十条目(23)

毛利家臣の小玉三郎左衛門に合戦譚を聞きたがった老中・土井大炊頭利勝(慶長十五〜寛永十五年在職)が、長州藩主・毛利秀就(慶長五〜慶安四年初代藩主)に頼み小玉を自邸に招くが、戦った相手の藪内匠と話が喰い違った場合、浪人中の藪のためによくない、と考えた小玉が、忘れたとの一点張りで終に語らなかった、という話である。「松田氏語ル」と記される話はこれ一点のみだが、素行ら兵学の師匠の話が政春の著作に多く収録されていること、毛利家所縁の話であること、逸話の年代が秀任が江戸にいた時期と重なることから、秀任が語ったものの可能性が高い。それにこれは主君を持つ藩士の優越を示す話題であると共に、浪人の身への同情・理解を示す話でもある。先祖の活躍を語る浪人兵学者だった秀任の生き様と重なる話題である。短い師弟関係の間に伝えられた話題がここで政春に書きとめられ、加賀藩の武辺咄文化の中に吸収されていたのではないかと思われるのである。

おわりに

元来武辺咄は、仰ぐべき人物や実践的な戦いの話を、嗜みとして語り合うものだったと思う。それが近世の兵学講義で、各流派の用語・兵法の例や、特定の人物観を形成する手段に利用されたことで、変容した節がある。

秀任の武辺咄集は、兵学者の文化で培われた作品が板本として世に出たもので、そこに価値があるだろう。けっして素朴で雑多な話の収集ではなく、兵学者として習得・収集した話題に立脚しながら、親類・知己との繋がりや、自分を含む武士の先祖顕彰の思惑等を意図的に内包させて成り立った、自身の人生・興味を色濃く反映した著作と考えられる。『武者』・『抄』に強く見受けられ、後続の武辺咄集に模倣されている歌好みの傾向や、仏教説話的な要素（秀任の入道というのは禅宗か）も、秀任の独自性の一つと思しい。

本稿では秀任の著作の要素の一つとして、脈々たる武辺咄文化を背負った加賀藩との関わりに注目したが、『武者』・『抄』の存在はまた、秀任に師事したことのある加賀藩士・政春の『兵談』・『乙夜』等執筆の一つの契機ともなったと思しい。政春の著作には、面白い話題の収集に熱中していた様子が垣間見え、怪談話、御家騒動の裏話、地元の小々な事件などありとあらゆる話題が、武者や兵学の話題と絡み合っただけで記録されている。ここにまた武辺咄の変質と裾野の広がりを見ることができ、その姿勢の継承と思しく、加賀藩ではその後も兵学者によって武辺咄集が数多く著されている。『武者』・『抄』の出現は、武辺咄集の一つの規範の提示となり、また以降の武辺咄集の盛んな執筆と多様化を促し、加賀藩の武辺咄／兵学者文化にも影響を与えたと考えられるのである。

(注)

(1) 松林靖明氏「夜話と武辺咄」(『中世文学の回廊』平成20年3月・勉誠出版) 参照。

(2) 景憲直弟子の北条流創始者・北条氏長は、先祖たる後北条氏の活躍する合戦記を

例に兵法を説いている。拙稿「北条氏長『兵法問答』の合戦語り」(『近世文藝』100・平成26年7月) 参照。

(3) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵(以下番号を付す書物は同館蔵)の『弓道秘伝書』(1681—487、正保三成)は、正保三年五月から翌年八月にかけて松田勘左衛門長次(秀任との関係は不明)が田丸掃部に伝授した五点の秘伝書の一つで、「六具番大事」として「ほろ・箆・ゆがけ・付テ幡・扇・鞭」を挙げる。種類が完全に一致する上『武者』の振り仮名のない「兵拾」はゆがけと見てよい)、箆が魔王の首を表す等の説明も酷似する。

(4) 長治もまた景憲直弟子で、寛永十九年に『甲陽軍鑑』の秘伝の印可を受けている。『大日本古文書』家わけ第二 浅野家文書(明治39年12月・東京帝国大学) 参照。山鹿素行との交流も知られる。

(5) 白木進氏「かたことの系譜(その一)」(『日本文学研究』14、昭和53年11月) 参照。なお荒木は万治四年に武辺咄集『古老軍物語』も刊行している。

(6) 長州藩士・和智東郊『虚実見聞記』(明和九序)は、『武者』を「長門浪人松田一楽」が同国の医者・赤川玄樸と相談し京都で書いたものとする。時代が下る上疑わしい点もあるが、長門・京との関連を記す点が興味深く今後追求したい。

(7) 三代藩主・長澄(元禄四年襲封)代の侍帳に「御目附 目安箱改/百五十石 松田半太夫」とある。『広島県史 近世資料編Ⅱ』(昭和51年3月・広島県) 参照。

(8) 六卷六冊。森田柿園手写本(090—076)による。元の奥書によれば延宝元年十二月から同七年九月にかけ成立したというが(現存する本はどれも有沢武貞(永貞子息)手写の系統で、奥書は一部を残し省略されている)、同八年以降の記事も見受けられる。政春についてはまた別稿で述べたい。

(9) 有沢致貞(武貞弟)『軍法伝来之次第』(1681—170)は「景憲の門弟万人に及び有之内、免許之弟子数百人、印可之者三十人余有之由」と、景憲の弟子の多さと、免許・印可を得た者の少ないことを記す。また、武貞代に、免許は持たないが藩士層に講義をしていた兵学者が加賀に存在したとの報告もある(近藤真史氏「加賀藩における有沢兵学の展開」(『加賀藩武家社会と学問・情報』平成27年10月・岩田書院)。秀任も免許の類は持たず講義をしていたか。

- (10) 三代藩主利常は、この合戦で丹羽方として活躍し、後に加賀藩士と成った成田半右衛門三政の案内で浅井囃を視察している。『成田家記』／『成田三政家伝』(16.34—50/51)、『先祖由緒并一類附帳(以下『先祖』)』(16.31—65) 成田外鏡・八九郎(共に明治三) 参照。付近の村々には、浅井囃の案内人を務めて副業とする者までいた。
- (11) 金沢市立玉川図書館近世史料館蔵の浅井囃合戦記の内、加越能文庫の『大正寺浅井縄手聞書』(16.51—28) 以下の十四点の文章資料を中心に調査した。『加越能文庫解説目録』下巻(昭和56年3月・金沢市立図書館) 参照。なお幕府に提出された『寛永諸家系図伝』前田利長の項目には「(慶長五年、三成謀反により利長が家康の命で大聖寺を落とす)こゝにをひて利長兵を引ひて金沢に入。同国小松の城主丹羽五郎左衛門長秀、兵を浅井縄手に出しこれを送る。松平伯耆守(康定)・水越縫殿助・岩田内蔵助(盛弘)・大野甚丞・井上勘左衛門(長政)等五人殿して、敵押江次太夫・不破奎兵衛・成田半右衛門・安彦左馬允・宮田小兵衛競来て鎧をあはせ、押江・不破討死す。故に敵引しりぞく」とあり『寛政重修諸家譜』も同様、浅井囃合戦についての前田家の公式な見解が知れる。丹羽方の記録には詳細な説明はない。
- (12) かなり潤色があるらしい大部の『能美江沼退治聞書』(16.51—32) 追加分には『武者』と同様の記載がある。これは『武者』によったかと思われる。
- (13) 『先祖』改田正樹、団多三(共に明治三) による。また松村との争いを長重に申し上げた文書が団の家に残っていたという『西台渉筆』(16.51—34)。
- (14) 桜木は鉄砲で前田方を狙った記事が諸書に散見される。成田助九郎からの聞書という『浅井囃合戦之記』(16.51—38) にのみ『武者』と同様の記事があるが、この書物は明治の写本で成立未詳。
- (15) 『先祖』江口久太郎(明治三)。以下の代はまた浪人したという。
- (16) 子息も九年に夭死するも、その子が石高を一層減らされかうじて家を存続。『加陽人持先祖』(16.31—38、寛文七成)、『先祖』山崎庄兵衛(天保二)・匏(明治三)、『山崎長門守家来侍帳』(16.36—42、寛永八成) 参照。
- (17) 『加陽人持先祖』、『諸士由緒帳』(16.31—39、寛文七成だが後代の付記あり) 等参照。古戦場の長氏家臣の墓は名所化し、『西台渉筆』(安永九年に巡見)、『浅井縄手合戦略記』(16.51—33、元治二年に巡見、『先祖』津田権五郎(明治四) から見て、藩

士・津田道賢の一時御役御免の際の著作か) など、実地検分を含む考証的な合戦記もある。なお長氏は存続できたが、領地の特例はその後取り上げられた。

- (18) 『絶家録』(16.30—109)、『加陽人持先祖』・『諸士由緒帳』(成敗した横山山城守の項目)、『先祖』横山三郎(明治三)・隆光(同六) 参照。『抄』で出現した上坂主馬もまた太田家臣という。

(19) 『能美江沼退治聞書』、『浅井縄手合戦略記』、『西台渉筆』 参照。

(20) 桑田忠親氏『太閤記の研究』(昭和40年12月・徳間書店)、長谷川泰志氏「戦国軍記の構成と構想」(『信長公記を読む』(平成21年2月・吉川弘文館) 参照。

(21) 16.51—29。丹羽方の田中兵左衛門、前田方の井上勘左衛門の物語に、小松・金沢の伝聞を併せ、合戦六十年後に記したという。すると万治三年『武者』刊行四年後) 頃の成立で、執筆動機には『武者』への反発も強くあるか。

(22) 16.28—110。三卷三冊。寛文九年から十一年にかけての成立。『政春古兵談』と同じく子息宛ての体裁を取り、本来両者は一体の存在と推定される。

(23) 『乙夜』中巻百十六条目にも、話者の記載は無いが同様の話が載る。

金沢市立玉川図書館近世史料館をはじめ、貴重な資料を利用させていただいた諸機関に感謝申し上げます。